

## JICA ボランティア・ケニアの思い出と私の人生

2019年1月  
松本公夫

### ◆JICA ボランティア・ケニアの思い出

思えば今から43年前の1969年、未知の国アフリカのケニアへJICA ボランティア青年海外協力隊として派遣された。

子供の時から漫画本の「少年ケニア」に憧れてはいたものの、いざ出発となると不安がつきない23歳であった。200名が派遣前訓練として現地事情、言語、体力づくり等の集中訓練を受け、最終試験に合格した。その後、約10本の予防注射を受け派遣となった。

現在とは違いケニアへは1日がかかりで、香港、ベトナム、カラチを経て首都ナイロビに着いた。ケニア派遣同期は6名だった。イギリスの植民地から独立したナイロビの街並みや公園はとても綺麗に整備されていた。道路沿いの公園には南国の花、ブーゲンビリアやジャカランタなどが咲き乱れ、郊外住宅街もイギリス風に整備されていた。後でわかったが、ヨーロッパ系やケニアの裕福な人達の一部が住んでいる住宅街だった。

しかし10kmくらい郊外には、世界でも5本の指に入る約70万人からが生活しているキベラスラム街があり、地方から仕事を求め同じ部族や知人を訪ねて出てきており戦後の日本の様な風景であった。1日少しの食べ物か、何も食べない生活を送っている。それは、現在も変わってはいない。キベラには世界からのNGO団体やボランティア団体が支援をしている。貧民者が多いが同情は禁物、個々には温厚な性格だが、集団となると変貌するので、物をあげないようと言われていた。私の住いは側にあり、そこから職場へ通勤していたが、スラム街の中へは入らないように現地の上司から注意されていた。

協力隊の先輩やJICA関係者、現地担当者の指導をうけ、アフリカ人の中で円滑に仕事を進めていった。日本で猛特訓してきた言葉は殆ど分からなかったが、日々会話をしているうちに、話が通じた時はとても嬉しく、工場内では誰

にでも話しかけ、また仲間からも話しかけられるようにとスワヒリ語と英語を日々勉強するように心がけた。ケニアでは日本人は珍しく頻繁に話しかけられるようになった。また自分も会話の楽しみを感じるようになってきた。

首都ナイロビの本部工場で約3ヶ月現地訓練をしてから、エチオピア国境に近い砂漠へ、実習生交替要員の100名と一緒に、トラックで1日かけて砂漠の悪路を移動した。建設省に雇われた人達と我が実習生からなる500人の大きな現場（キャンプ地）は何もない360度砂漠の世界であった。

そこではイタリアの支援で道路建設が行われていた。住居はテントや簡易的な家であった。砂漠には樹や岩等の障害物はなく、盛土の道路建設は日々進んで30km仕上がると、全員が移動開始しする、その繰り返しであった。

私が所属する車両点検修理班は整備士実習生等20名で対応したが、部品がなく苦勞をした。しかもキャンプ地の夜は、猛獣がいるため外出は絶対禁止となっていた。またキャンプ内にも蛇やサソリが日常茶飯事のように見られた。そのため、犬や家畜を飼って事故防止に役立てた。



砂漠の中にもマサイ系の家族が住んでいた。女性や子供は常に遠くまで水汲みに出かけ、男性はウシやヤギを連れて移動する独自の生活をしていた。砂漠の中でも木の茂っている所にはヨーロッパから派遣され活動している簡素な教会があった。そこに子供を集めて食事やシャツ等を与え、言葉や教育も指導していた。家畜を売る時、子供が通訳をして売り買いをしていた。

砂漠生活も2年が過ぎた頃、実習生交替要員と共に、かつてイギリス海軍の訓練工場だった建物を職業訓練校に改装した職場へ異動した。そこはインド洋に面した東アフリカ海の玄関モンバサ港の街で、ケニア第二の都市であった。訓練は1年コースで無料、政府が無職の若者の育成のために、各地域から英語が話せるか身元調査等の簡単な面接で入寮させ勉強の機会を与えていた。



モンバサ職業訓練所（製図・自動車整備実習）

私の借りていた住まいは島内にあり、訓練所へはフェリーで15分、そこから約20分の道を貸与されたオートバイで通勤した。仕事は7時から14時まで、30名の整備士希望者に指導した。訓練所には電気、大工、配管、建築、溶接科があり、各国からボランティアも派遣され現地の指導者と組み、それぞれ指導をしていた。



1年が過ぎ、何か運動を指導したいと思い、学生時代にバレーボールをしていたので、人選をして指導を始めた。用具等は自腹だったが山梨のロータリークラブからも支援をしていただいた。バレーボールクラブは順調に進み、大きな試合にも勝ち、我がチームは地域でも知名度が上がってきた。試合に勝てば生徒の外出許可をとり、時には映画や飲食で祝って励ました。

全てを自分がしなくてはと無我夢中で仕事やスポーツに取り組んだ6年が過ぎ、帰国する日が近づいてきた。思えば日本人商社関係者や隊員とも付き合い、常にケニア人と一緒だったため日本語も忘れていた。最後の思い出に、休暇に入った時、生徒の住む田舎を1週間かけてオートバイやバスで訪問した。皆質素な家、貧しい生活。しかし、日本人が来たと家族は暖かく迎えてくれ、鶏やヤギなどの肉、果物や地酒等でご馳走をしてくれた。収入も何も無い平和な田舎だ。帰る時にはお礼にとそっとお金を少し渡した。

帰国する為、首都のナイロビへ向かったが、ナイロビでは貧富の差の大きさに驚いた。私物は殆ど処分したため、持ち帰る物はなかった。関係者に挨拶をし、6年間滞在した素晴らしい国ケニアを空から後にした。燃え尽きた青春、大陸を空から見ても涙は出なかった。

機内で目をつぶり6年間の振り返った。遂に日本へ着くと考えた時、不意に涙が出て来た。日本へ到着の翌日、即 JICA 事務所へ向かった。

「ケニアから戻った松本です」と申し出ると、暫くしてから「すみません、名前が分からないので時間がかかります、後日また来てください」と言われた。「えーどうして、6年前の記録を見てください」と説明して引き返した。

翌日行くと、「6年間で2回ほど組織が代わり、確認に時間がかかりました」と言われた。



#### ◆ケニアから帰国後

途上国の活動に燃え尽き症候群状態で日本に帰国した当時、日本で見るもの、触るもの、食べるもの全てが新鮮だった。次第に生活にも慣れてきたが、テレビのお笑い番組は言葉が早すぎて理解するのが大変だった。

その後、生活をしていく為いろいろな仕事に就いた。

- ① 山梨出身大臣の私設秘書を2年間務めたが、仕事が合わず退職した。
- ② 英語に関係した仕事をしたいと富士通山梨へ学卒10名と共に就職し、総務・庶務・福利厚生・海外研修生の担当をした。学卒の若者と違い年をとっていても仕事は不慣れ、しかもワープロしかできず仕事の壁にぶつかり長期にわたり苦しんだ。「ケニアへ戻りたい、アフリカで自由に仕事をしたい」と常に考えていた。しかし、景気のいい時期だったので、海外からのお客様、東南アジアの下請け会社からの実習生も増え、生活や仕事等の指導や世話人として、日本人の不得意な業務を全て担当した。また東南アジアのフィリピン、シンガポール、香港等の担当のため定期的に出張があり生き抜くことができた。

仕事にも慣れてきた60歳で定年退職をした。

- ③ やはり外国人対象の仕事をしたいと考え日立山梨へ就職した。海外実習生

(フィリピン生 20 名、タイ生 20 名、他 10 名) に対して、日本での生活や仕事を円滑に遂行するために不可欠な日本語指導をした。また生活上のルール等は絵を書いて指導することもあった。2 年過ぎる頃、ヘッドハントされ山梨県国際交流協会へ就職した。

④ 山梨県国際交流協会では、1 年契約だが後任者がおらず結局 8 年間も勤めることになった。その間、「外国人との多文化共生、週末の富士河口湖駅他で通訳ガイド等」、「海外からの留学生、研修生の研修課長」、「建物・設備・庭園等の保全管理業務次長」、「日本人および外国人との協働イベント開催」、「プロによる外国人対象何でも法律相談窓口」、「渉外担当」、「県招聘の海外研修生の研修支援」、「姉妹都市への事業支援対応窓」など、多くの仕事を担当した。

8 年が過ぎた時、年齢も 72 歳になりサラリーマン生活に終止符をうった。現在は、自由に各種イベントの応援をしている。

#### ◆ケニア時代とその後の人生を振り返って

幼少の頃から厳しい環境で育った私は、人との交流指導とはかけ離れた生活をしてきたが、運よくケニアへ派遣された。彼らは、“何も無くても心までは貧しくない”、また“助けあい精神”で、食べ物が無くても強く生きている。

JICA ボランティアとして 6 年間のケニアでの生活を通して、“人間はどう生きるか”について、彼等から多くを学んだ。言葉の壁にぶつかった時、彼等に支えられ、自分でも努力して業務を遂行できた。

帰国後はケニアでの経験を活かし、多文化共生・協働の精神に基づく仕事や活動に長く携わってきた。その中で交流・会話に歩み寄る実践をすることができたと自負している。

---

#### ◆写真集(1)：ナイロビの今（約 10km 先には、サファリパークもある）



◆写真集(2)：現在のキベラ（スラム街）



給食欲しさに入学者の子供達、しかし一部負担の学費が無く半分は辞めてしまう。

◆写真集(3)：マサイ族（今も伝統を守り生活をしている）



マサイ夫妻(ジャクソン氏と第二婦人日本人妻マキさん)と仲間たち



サファリパークと中国支援で建設された新幹線